

編集後記

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』9号の刊行にあたり、執筆者、査読者の方々をはじめ、ご協力を頂いた多くの皆様に心よりお礼を申し上げます。

本号は2本の寄稿論文、5本の投稿論文、3つの研究プロジェクト活動報告、そして3つの書評から構成している。

巻頭2本の論文は、伊藤るり（当センター教授）、足立真理子（当センター助教授）による科学研究費補助金基盤研究（A）（1）「東アジアの植民地的近代とモダンガール」（研究代表者 舘かおる）に基づく研究活動の成果報告である。同プロジェクトは、1920～30年代にかけて、日本の都市部大衆消費文化の形成とともに登場した「モダンガール」を国際的社会現象として捉え、このような現象を支えた思想、教育、都市文化、政治経済、そして植民地支配の展開を、東アジアの植民地的近代という問題構制の下で考察することを目的としている。この植民地的近代の文脈でモダンガールを分析しているのが、伊藤、足立論文である。

投稿論文としては、若手研究者の論文を5本掲載している。それぞれが扱う研究テーマは文学、歴史学、社会学と実に幅広いが、どれもジェンダー的な視点に立つ意欲的な論文であり、ジェンダー研究がいかに関野横断的であり、また学際的な課題を扱っているかを物語っている。

李論文は植民地朝鮮の「新女性」たちの母性に関する言説を考察し、ジェンダー・バイアスによって支配・抑圧の対象となってきた女性の歴史を再考する。今後、植民地朝鮮の「新女性」と日本のそれを比較する研究を刺激する試みといえよう。

英論文は「女性の身体」に注目し、個人の美の追求の問題をジェンダーと権力の関係から議論する。女性の美の追求の現れである美容整形を主題とするイギリス小説をはじめ、文学作品の中に、女性の「選択」であるはずの美容整形が、実は社会の権力構造を強く反映していることを明確に読み取っている。

斉藤論文は女性教員が抱える職業と家庭の両立問題を、産休・勤務能率問題という行政の対応と関連させ、私と公の空間の交差で生じる力学の解明に挑戦している。職業と家庭の両立問題という女性教員の切実な問題が行政側の論理に吸収されてしまう様相を、1920年代の京都市の事例を通して手堅く実証している。

久保田論文はイギリス・ルネサンス演劇の中で、「女性」の言説化された身体を演じたのは女性ではなく少年俳優であったことに焦点をあてる。舞台での表現者である「少年」の性を視座に据えることで、劇世界のヒロインたちという虚構と、現実の社会で生きる女性との狭間にあるイデオロギー性を、丹念に描き出している。

小高論文はジェンダー化された組織に男性が参入する際に生じるアイデンティティの変容を、オーラルヒストリーという手法を使って考察する。ジェンダー化された組織への女性の参入をテーマとする従来の研究の視点を逆転させた新しい取り組みといえよう。

研究プロジェクト活動報告では、まず河野貴代美(本学開発途上国女子教育協力センター客員教授)・竹村和子(本学人間文化研究科教授)より、「女性のメンタルヘルス研究プロジェクト」の研究活動の経過と成果についてご報告を頂いた。

次に、ホーン川嶋瑤子(当センター客員教授)・館かおる(当センター教授)が、『大学教育とジェンダー』として刊行された著書の紹介を通して、共同プロジェクト「大学教育とジェンダーⅣ」の成果について報告している。

三つめの研究活動報告は、私が担当した。4月にセンターに研究機関研究員として赴任して以来、センターの諸活動(特に、年報の編集・刊行や夜間セミナー)に関わってきた。その一方で、研究活動としては紛争後社会における女性の政治参加の問題について研究を進めており、本号で研究内容を紹介する機会を与えてもらったのは光栄である。

書評では最新の3冊の本を紹介している。どれもジェンダーの視点に立っているが、分析の対象は科学、政治、および経済活動(外国人労働者の問題)に至る様々な現象である。評者の一人が指摘するように、ジェンダー研究がこれまで以上に分野横断的になっていることを示唆している。また、フィリピン女性エンターテイナーを題材にした本を取り上げられたのは、センター主催の第18回夜間セミナーでラセル・パレーニャス先生(米国カリフォルニア大学ディヴィス校准教授)が国際移動をテーマに講義されたこともあり、まさに時機を得た書評となった。

今年度、初めて『ジェンダー研究』編集事務局を務め、不慣れな面も多々あったにもかかわらず、年報が無事に刊行の運びとなったのは嬉しい限りである。これも、ひとえに編集委員の先生方をはじめ、校正者の方々のご協力のおかげと感謝している。ご協力を頂いた方々に深く感謝の意を示すとともに、読者の皆さまには『ジェンダー研究』への変わらぬご支援をお願いして、編集後記を閉じることとした。

編集事務局 林 奈津子(研究機関研究員)